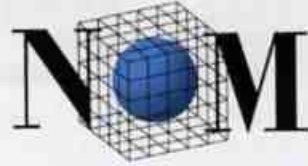


新潟県立近代美術館便り

# 雪 椿 通 信



第15号

2000.9

# 「ナビ派と日本」展

9月15日(金)～11月5日(日)

ひょっとすると、芸術家をめざす男性は多かれ少なかれ、どこか神の似姿としての自分を求めてきたのかもしれませんが。それは不運でも不可解でもなく、たとえば絵を描くことなどは、世界を感じる手段としてはむしろ安全で合法的な方法だと思います。ただ、不思議に思いますのは、時折、自分がそうであろうとする多数に加えて、他の人の内にそれを求める人たちもいるように思えることです。

たとえば19世紀末の「ナビ派」ですが、今でこそ、一人一人の作品がよく知られ、美術史上の位置づけもされていますけれど、思えば奇妙な命名をしたものです。「ナビ」とはヘブライ語で「預言者」という意味だそうですが、なぜ「預言者」なのでしょう。今まさに新しい芸術を生み出そうとしている若者たちが、なぜ、神の言葉を預かって救世主の到来を予告する「預言者」を名乗るのでしょうか。自ら救世主になろうという気持ちはなかったのでしょうか。

彼らは19世紀末という、ちょうど狭間にいました。後期印象派や新印象派を受けて次の世代に橋渡しをした、と言われることもあります。どちらかというところ、それまでの諸潮流を、とにかく一度まとめてかき混ぜてみようとしたようでもあります。学生時代の友人たちを核にした小グループで、印象派やフォーヴィスムのように、誰かに注目されたり強烈な嫌悪を与えつつ次第に無視しがたい力を持った運動になっていったというわけではあ

りません。

ところが、後になって、ある意味で人々は驚くことになります。モーリス・ドニが1890年という早い段階で“絵は具体的な主題である以上にある秩序のもとに配された色面なのだ”というような事を言いましたが、それがあたかも抽象絵画の登場を予見したように思われたからです。あろうことか、「預言」が成就してしまったというわけ

です。もちろん、やって来たのは神ではなく、その相似形である複数の天才芸術家たちでしたが、このとき密かに、もう一つの別の存在も生まれていました。それが「画家<sup>たち</sup>=批評家」という、何とも興味深い人々です。

かつて、我が国でも画家兼批評家や詩人兼思索家といった人たちを多数輩出した時代がありました。もしかすると、同じ様な背景を抱えていたのかもしれないと想像します。

こんなことを言った人がいます。「彼はくる、きつとくる、自分はそれを待っている。彼が来てくれると自分はまいるかも知れない。しかし彼が来てくれないと困る。・・・彼は唄ふ、強く唄ふ、すべて彼の唄をきくものは彼の歌を唄はないではいられない。・・・」まるで、荒野に呼ばれる聖ヨハネのようですが、実は武者小路実篤が「白樺」に載せた一文です。新しい美の担い手である「彼」を自分は待っている、というのです。

# 「写真の世紀」展 ～写真家が見た20世紀～

11月18日(土)～12月24日(日)

20世紀、科学技術はめざましい発展を遂げ、人びとの暮らしを大きく変えることになりました。しかし、一方では戦争の世紀といわれるほど多くの戦争が繰り返された世紀でもあります。21世紀を迎えようとしているいま、私達はこれまでの歩みを振り返り、20世紀がどんな時代であったのかを検証し、これからどう生きるかについて真剣に探っていかなければならないでしょう。

本展は20世紀の時代性やそこに生きた人間の姿を世界の著名な写真家の代表作品によって見つめ直そうというものです。第1章「20世紀の幕開け」、第2章「激動の記憶」、第3章「芸術の新思潮と写真」、第4章「現代のヒューマンイズム」の四章で構成されます。さらに20世紀を代表する著名人のポートレイト60点を「20世紀の人たち」として展示いたします。

第1章「20世紀の幕開け」では、20世紀初めのヨーロッパや新興都市ニューヨークの人々の様子を紹介します。自動車や飛行機を楽しみの道具としたり、リゾート地で

過ごす人々を写したジャック＝アンリ・ラルティエグ。アメリカ近代写真の父といわれるアルフレッド・ステイグリッツ。そして、アメリカの影の部分伝え、波紋を投げかけたルイス・W・ハイン。そのほかウィージーらの写真32点で構成されます。

第2章「激動の記憶」は二度の世界大戦とベトナム戦争など米ソの対立構造の中で生じた戦争、宗教や民族を背景とするものなど生々しい戦争の記録81点です。第二次世界大戦ではナチス・ドイツに対しフランスで抵抗運動を続けたレジスタンスの姿をカルティエ＝ブレッソン、ドアノーが捉えています。また、ノルマンディー上陸作戦に従軍、人間ドラマを伝えたのはロバート・キャパ。一方太平洋戦争ではアメリカ側の戦争記録のためユージン・スマイスが従軍していました。

第3章ではシュールレアリスムの写真を中心にその時代と社会の動きを辿ります。マン・レイ、アンドレ・ケルテス等の写真が展示されます。

明治以降、直接にまた間接に触れることになったヨーロッパの美術の多面性と変化の早さは、それを受け入れる側にも知的・心理的に多くを要求することとなりました。転換期には熟するのを待っている時間はないものです。誰か、ではなく、自分。さもないければ状況が動かないような気持ちにかられて、ここでも多くの若者たちが垣根を越えてグループを作り、自ら名乗り、何かをつかみ取ろうとしていました。

特に明治から大正にかけて行われた数々の試みは、様々な流派や傾向が視野に入ってくる中での格闘であり、ナビ派が(戦略的に)行おうとした美的な錬金術しながら、どこか垣根をかき回すような行為でもあったのかもしれませんが。

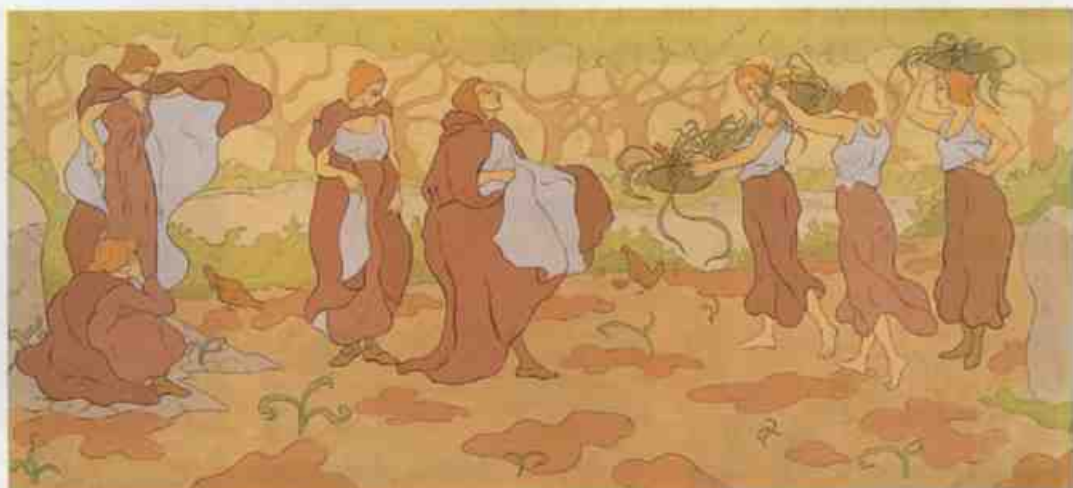
運動の後には個の成熟がやってきます。しか

し宿命的に短命であった彼らの集いの、その一瞬の光芒は、何に対するブレーキでありアクセルであったのでしょうか。よろしければ、一緒に考えてみませんか？

(主任学芸員 佐々木奈美子)



津田青楓(東の女王「東の女王」(石波書店)装幀)  
大正6(1917)年 国立近代文学館



ポール・ゴーッラン(タヒチの7人の女性) 1895年

第4章は名作といわれる写真史に残る作品67点です。アンリ・カルティエ＝ブレッソン、ユージン・スミス等7名の写真家の作品を見ていきます。

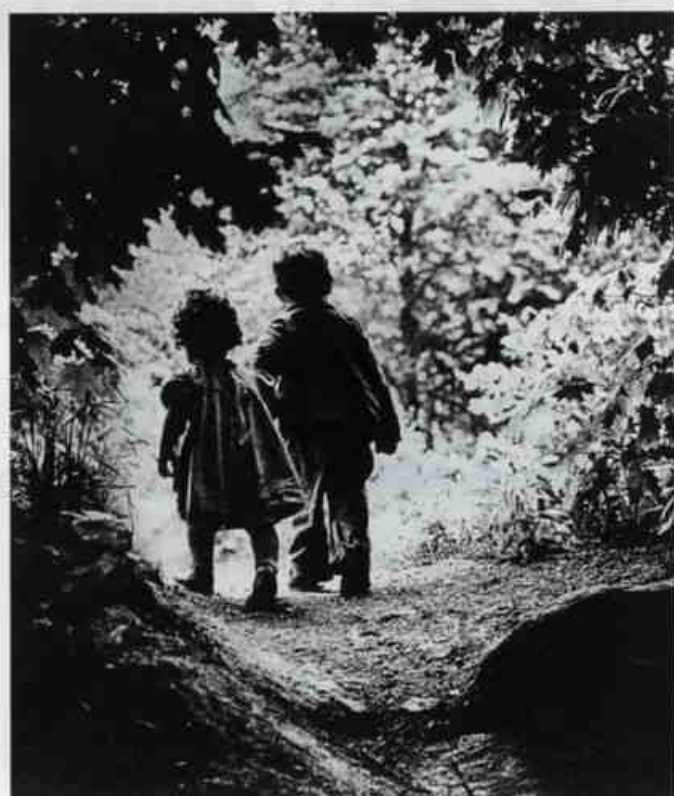
そして、エピソードではガガーリン、ダイアナ元英国皇太子妃、セナ、ビートルズ、チャップリン、オードリー・ヘプバーンなど現代の著名人の写真を展示します。

写真は時の流れの一瞬を切り取ったものです。しかしそこには実に多くのことが語られています。誰もが手軽に写真を撮ることができる時代であってなお本展出品物が特別の意味を持つのはどうしてなのでしょう。

(主任学芸員 中嶋 均)



デイヴィッド・ターナー  
「サウエウムの山中でイスラム教徒の結婚式がおこなわれている最も伝説的瞬間」1995  
©David Turnley/Corbis/PPS



W.ユージン・スミス「家園へのあゆみ」1946  
©The heirs of W.Eugene Smith/PPS

# 深澤索一と近代の版画

2001年2月26日(月)～3月20日(火)

会場:県民会館ギャラリー(新潟市)

この3月にシリーズ内容を一新して始まった「新潟の美術・近代美術館セレクト」。その第2弾として吉田町出身の版画家、深澤索一の展覧会を開催します。

版画と言えば、私達日本人には木版画が最も馴染み深いものです。広重や北斎などの浮世絵版画がまさにそれですが、こうした浮世絵版画は、絵師、彫師、摺師の職人的分業体制の下に作られ、その上、版元の意志によって仕事が左右されたりしました。そうしたことは明治維新後も錦絵などに引き継がれます。また一方で版画と言えば明治末までは絵画の複製品のように見られ、独立した美術の一分野には見なされていませんでした。しかし、明治も後半になると西欧の新しい美術思潮の影響を受け、自我に目覚めた作家達はすべて自分の意志、手による、オリジナルの版画を作り始めます。そうした動きは創作版画運動となり、版画の近代化を進め、大正、昭和へと発展、展開してきました。深澤索一はそうした創作版画運動の展開の時代、版画の地位確立を推し進めた一人でした。

その索一が他界して既に半世紀以上経ちますが、これまで展覧会などで数点、創作版画家の一人として作品が紹介されるだけでした。『新東京百景』に代表される当時のモダンな作風を眼にすることもありますが、初期の構成的な作品や、後半の水墨画的な作風などはあまり知られていません。この展覧会では、そうした彼の幅広い作歴を、版画はもちろん、デッサン、水墨画などの作品や資料から紹介します。また、恩地孝四郎、川上澄生、諏訪兼紀、平塚運一などの仲間達や、同時代の版画家達の作品を併せて展示し、版画にもたらされた近代の時代をご覧くださいませ。(主任学芸員 松矢国憲)



深澤索一(画)新潟小品集より「冬日」1932年 当館蔵



深澤索一(画)〈依題・デッサン〉個人蔵



深澤索一(画)「丘上道土」1925年 東京国立近代美術館蔵



深澤索一(画)「昭和通ガソリンヤ」1931年 当館蔵

## モノクロームの世界

2001年1月30日(火)～3月11日(日)

～長谷川潔・駒井哲郎の版画を中心に～東京国立近代美術館所蔵作品より

東京国立近代美術館は昭和27年に開館し、わが国における近代美術の系譜を見渡すため、近代日本の代表的な美術作品を収集、保管し、関連した研究活動を行ってきています。昭和51年度からは、外国の近代美術作品の購入も行い、現在収集作品は、日本画、洋画、彫刻、版画、書等、多岐に渡っています。

本展では、東京国立近代美術館が所蔵し、日本の近代版画を代表する、長谷川潔・駒井哲郎の作品を中心に展

示いたします。二人は共にフランスに渡り銅版画の研究をしています。長谷川潔はすでに失われていたマニエール・ノワール(メゾチント)の技法を復活させたことで知られ、また駒井哲郎はアクアチントの技法による優れた作品を残し、日本に銅版画の技法を根づかせた功労者です。

是非この機会に東京国立近代美術館の優れた版画作品の数々をご覧ください。(主任学芸員 麻績勝広)

# 野外彫刻と語らう - 屋上庭園から (7)

松井紫朗《Voice-Scope》

屋上庭園への駐車場側の入口付近から、土手に平行に5メートルほど伸びた管に大きなラッパ。管の中ほどからは、駐車場側に向かってもう一本のラッパが分岐しています。ここからの眺望は、信濃川の河川敷。畑や、のどかな自然の風景が広がります。



松井紫朗《Voice-Scope》1997年

ここは、屋上庭園を訪れた子どもたちや恋人たちの恰好の遊び場。みんな、自分の背丈よりも大きなラッパの中心に空いた穴を見ると、ついついのぞき込まずにはいられません。そしてその次には、向こうとこっちに分かれて声を出し合うのです。当館の野外彫刻の中で、人々にいちばん親しまれているのは、この作品かもしれません。

美術品としての「彫刻」という言葉には、どこか高尚な感じの取り澄ましたイメージがあるかもしれませんが、この作品は、公園にある遊具のように、親しく人間と関わります。細長い管と大きな朝顔型に広がるラッパは、造形的にとってもユニークで、美術作品としての役割は十分果たしています。そしてそれだけでなく、この作品には、物と人間との関係、さらにはそこにいる人間同士の関係をも取り持つ力さえあるようなのです。

様々な素材に興味を持ち、ユーモアを持って制作を続ける作者の人間性が、ここにも反映されているのでしょうか。

(主任学芸員 宮下東子)

## 表紙作品解説 フェリックス・ヴァロトン《怠惰》1895年

スイス生まれのヴァロトンは、1892年からナビ派の仲間となり、雑誌の挿し絵画家等として活躍しました。

本作は、木版画を本領としたヴァロトンの代表的な作品で、大胆な白と黒の平坦な面により際立たせられている形態は、その後の木版画復興の気運に影響を与え

ました。日本にも早くから紹介され、『現代の洋画』23号には「うすらつかれ」という題で掲載されています。

本作は9月15日から開催される企画展「ナビ派と日本」に展示されます。

## 美術館友の会からのお知らせ

### ◎企画展開場式のご案内

ナビ派と日本 9月14日(木)

「写真の世紀」展 11月17日(金)

※いずれも午後2時から。

当日は受付で会員証をご提示ください。

### ◎これからの催し

友の会作品解説会 ナビ派と日本

10月9日(月)午後2時～

研修旅行 尾張美術紀行

10月17日(火)～19日(木)

名古屋市の徳川美術館などを訪れる

2泊3日の美術館巡りの旅。要申込。

### 友の会作品展

10月24日(火)～29日(日)

最終日午後3時まで

会場：当館2階ギャラリー

入場無料

### ◎作品募集

作品展の開催にあたり、会員の皆さんの作品を募集します。

※作品の応募方法、研修旅行の申込など、詳細については、友の会事務局までお問い合わせください。

TEL.0258-28-4111

### 利用案内

■開館時間／午前9時～午後5時

■休館日／毎週月曜日

※ただし、10/9、1/8、2/12は開館し、翌日振替休館。

および、9/11(月)～9/13(水)、12/25(月)～

1/3(水)、3/26(月)～3/31(土)の各期間休館。

■観覧料金

・企画展観覧料

企画展によって観覧料が異なります。

なお、同観覧料で、常設展もご覧になれます。

・常設展観覧料

一般……410円(330円)

中等教育(後進)・高校・高等専門学校……200円(160円)

小学・中学・中等教育(前期)……100円(80円)

※( )内は20名以上の団体料金です。

THE NIGATA PREFECTURAL MUSEUM OF MODERN ART

新潟県立近代美術館

新潟県長岡市宮岡町字居掛278-14 〒940-2021

TEL.0258-28-4111(代) FAX.0258-28-4115

http://www.lalinet.gr.jp/kinbi/index.html

e-mail kinbi@coral.ocn.ne.jp

2000.9.1発行 4,000部

# 美術雑筆

## 「鳳凰堂の彫刻」

新潟県立近代美術館長  
水野敬三郎



近代美術館の前身の新潟県美術博物館時代から通算して、10年間館長を務めました前川誠郎にかわり、本年4月から、水野敬三郎が館長に就任いたしました。

今年、2年後に迎える開創950年を記念して「国宝平等院展」が開かれています（東京・仙台・山口）。この展覧会の中心となっているのはいわゆる雲中供養菩薩像です。鳳凰堂の本尊阿弥陀如来像を開んで四周の長押上に懸け並べられた群像で、雲に乗って飛翔しながら奏楽し、あるいは舞って阿弥陀如来を讃嘆供養する天人達です。ふだんは目の届きにくい高みにいる天人達が、揃って間近に舞い下りたさまは、まさに壮観です。

鳳凰堂は藤原頼通が平安時代の天喜元年（1053）に建立し、本尊は仏師定朝の作として有名です。雲中供養菩薩像も定朝の一門によって同時に一斉に造られたものです。この鳳凰堂の彫刻について近年気がついたことを記してみたいと思います。

何年か前のこと、ある晴れた日に鳳凰堂の堂内に数人で坐って本尊と向きあう機会がありました。堂の前にひろがる池に反射した光が堂内にさしこみ、金色の仏身は波のゆらめきと共にまるでかすかに揺れ動くかのような感じがしました。いつもは大勢の拝観者が仏像の前につめかけて光の反射をさえぎっているのですが、このような現象に気がつかなかったのでしょうか。かつて飛鳥・奈良時代には仏堂の内部は不可侵の聖域とされていましたが、この時代ともなれば頼通は鳳凰堂の中に入って阿弥陀如来像を間近に拝むことができたはずで、われわれも頼通と同じ仕方で像を拝んだといえるでしょう。

そこで思い出したのは11世紀前半に書かれた『栄華物語』に出てくる話です。治安2年（1022）藤原道長が建てた法成寺の金堂を供養した際に、堂の前の池に色々の造花の蓮花を浮かべ、その一つ一つにのせた仏の「御影は池に写り映じ給へり」（巻17、おむがく）。また万寿4年（1027）同じく法成寺の釈迦堂に安置すべく、百体の釈迦像を車や輿にのせて池のほとりを運んだ時、「御堂の池の上に仏の影ども写りて、又顯れ給へる仏と見え給へり。限りなく尊し」（巻29、たまのかざり）。どちらも池に写った仏の影を讃嘆している文章です。水に写って波と共にかすかに揺らぐ、夢ともうつつともつかぬ仏の影は、王朝の人達の美意識にまことに好ましくうつったのでしょう。鳳凰堂は逆に水の反射で仏像の方がゆらめいたのですが、同様の効果を生んでいるといえそうです。

同じ感覚を『今昔物語』巻12にある話にも読みとることができます。道長が法成寺の金堂の前に百体の丈六仏の絵像を懸け並べて供養した時、それらは「風に吹かれて動き給ふが生身（しょうじん）の仏の如くして、貴きこと限りなし。」これは『日本紀略』や『小右記』などによると治安元年（1021）3月29日のこと、もちろん旧

暦ですから今の暦では4月の末、新緑の微風に揺れる絵像が想像されます。水の反射でかすかにゆらめく鳳凰堂の阿弥陀如来像にも生身の仏を感じたのではないのでしょうか。

飛鳥時代以来の仏堂は回廊に囲まれ、自然と隔絶された仏の聖域であり、その堂内にまつられた仏像は自然の偶然性と切り離された不動の存在でした。それに対してこの鳳凰堂は宇治川に臨んで、回廊で仕切られることなく、堂自体が周囲の自然に溶けこんでいますが、また堂内に自然を取り込むことにより、自然と共に動く彫刻を造り出しているといえます。なお、次の鎌倉時代になると、阿弥陀如来像が堂の背後からさしこむ西日を後光のように負い、堂内の構造材の丹塗りが反射して金色の仏身が赤く染まり、その輝きが刻一刻と変化してあたかも来迎のドラマを演出するという播磨浄土寺浄土堂の例があります。大変強烈な仕掛けに発展するわけですが、鳳凰堂ではさすがに王朝時代の優雅な演出に留まっています。

鳳凰堂内に懸けめぐらされた雲中供養菩薩の群像は、いま述べてきたようなゆらめき、静かな動きを像自体として表現したものといっただいでしょう。藤原仏画の名品として名高い東京国立博物館の普賢菩薩像の、象に乗って少し前かがみになった姿にも、このゆらめきがみごとに表現されています。この時代の美的感覚の一つの典型的なあらわれといえます。

